
詩集：ポエムな世界

T-99

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

詩集：ポエムな世界

【Nコード】

N0607U

【作者名】

T-99

【あらすじ】

気持ちを中心に表現した詩。
心の翼／第2章から

勇気をください

海に見える小さな町

波音と笑い声が響きあう

練習したはずの言葉

まぶしすぎる君の笑顔で

形にならず消えていく

思いを届けるために必要なもの

少しだけ僕に勇気をください

波打ち際ではしゃぐ君

包まれる優しさに戸惑う

手を取り気持ちを重ねると

すいつく砂がこぼれ落ち

迷った時間が動きだす

君を抱きしめるために必要なもの

少しでも僕に勇気をください

自信を持ってない僕

そんな僕に自信をくれる

人を愛する難しさを知ると

隠しきれない思い溢れだし

伝えたくなる君への気持ち

優しい君を守るために必要なもの

少しでも僕に勇気をください

天使と悪魔

天使が突然舞い降りた
ひとつ願いを叶えましょう
天使がそつとつぶやいた
どんな願いも叶えましょう
僕は願いをつぶやいた
彼女が僕を好きになる

天使が首を横にふる
あなたの願いは叶ってます
天使がそつとつぶやいた
叶ってない願いを叶えます
僕はあわてて駆け出した
彼女のところに駆け出した

悪魔が突然あらわれた
あなたの願い叶えましょう
かわいい悪魔がささやいた
どんな願いも叶えましょう
僕は願いをつぶやいた
僕の天使になってください

悪魔が首を横にふる
悪魔は天使になれません
かわいい悪魔がささやいた
すてきな願いをありがとう

僕は思わず微笑んだ
彼女も僕に微笑んだ

孤独を感じる時はないかい？

満たされてるはずなのに不安にかられる時

人のやさしさが懐かしく意味もなく電話をかける

他人と異なるのにそれがよくわからない時

いつもと違う不思議な感覚が心の中に湧き上がる

励まされて意味もなく落ち込んでしまう時

ただ素直に生きたいだけなのに思いは伝わらない

大切な彼女が目の前から消えてしまった時

気がついた大切な人に対して言葉がでてこない

風のように吹き抜けていく疾走感

物事がうまくいかないのに笑顔になれる瞬間

醜さ弱さ足りなくて満たされない心全てで

孤独を感じる時はないかい？

それは心の弱さ？

後悔と自責の念？

理解されないむなしさ？

それとも理由もなく誰かを求める寂しさだろうか？

孤独を感じる時

それは心を癒す時……

運命の人じゃない僕だけど

好きな人とずっと一緒にいたかった

寂しそうに話す君の声が聞こえる

恋に破れ寂しいと僕の部屋を訪れる君

届かない思いを抱えているのは僕も同じさ

大切なのは人を好きになるその気持ち

君にとってきつと僕は運命の人じゃない

だけどいつか君が笑顔でその人と会えるまで

そばにいてあげるよ

だからもう泣かないで

小指の先の赤い糸が見えていたらいいのにな

涙が止まらず話している君の声が胸に響くよ

苦しまなくてすむ恋を君はいつも求めるけど

やっぱりそんな恋はつまらないと僕は思う

大切なのは傷ついても人を好きになるその証

君にとってきつと僕は運命の人じゃない

だけどいつか君がその人と笑顔で会える日まで

そばにいて守ってあげる

だからもうおやすみ

それでいいのかい？

こんなもんだらうと決めつけたことがある
妙に納得しながら言い訳ばかり並べて
満たされない気持ちを抱えたまま
いつのまにか大人になっていた

それでいいのかい？

知らない間に人を傷つけたことがある
自分のことしか考えないでみて見ぬふりして
何の疑問も感じないまま
精一杯生きてるつもりだった

それでいいのかい？

不可能だと思つてあきらめたことがある
夢みることを忘れ妙に冷めていて
幸せの形を勝手に決めつけたまま
年だけ重ねてきた

それでいいのかい？

心の中に消えない思いがある
色あせることなく持つていて
無限の希望を抱えたまま

何度も湧き上がってくる情熱

もう一度だけががんばってみるかい？

声援

頑張っている人に声をかける

もう頑張れないよ

一生懸命努力したのだから

逆に声が人を傷つけることになっても

何もできないから

力になれないから

見守るだけでは寂しすぎるから

この気持ちを声にだす

あなたに頑張ってもらいたいから

傷ついている人に声をかける

ほっといてくれよ

時がたてば忘れるから

逆に見守る方がいいとわかっていても

何もできないから

力になりたいから

祈るだけでは思いは伝わらないから

この思いを声にだす
あなたに必ず届くと信じて

好きな曲は僕の思い出

好きな曲を順番に聴いてみた

修学旅行のとき歌った曲

失恋したとき聴いた曲

聴けば鮮やかに蘇る気持ち

好きな曲には思い出が宿る

喜びも悲しみも思いたす

好きな曲を順番に聴いてみた

文化祭のとき踊った曲

部活の練習で流れた曲

聴けば鮮やかに蘇る気持ち

好きな曲には思い出が宿る

楽しみも苦しみも思いたす

好きな曲を順番に聴いてみた

それは全て僕の思い出の曲

あの頃を鮮明に思い出す曲

過去から現在を結ぶ記憶

好きな曲には思い出が宿る

きつと次も素敵な曲が刻まれる

大好きだった犬の太郎

大好きだった犬の太郎

生れてからずっとぼくの友達

たくさん遊んで一緒に眠った

もう決して動かないぼくの太郎

ねえ太郎どうかぼくに教えて

生きているってどういうこと

大好きだった犬の太郎

いつも一緒だったぼくの友達

たくさん涙がこぼれて泣いた

そのあと自然にお腹が鳴った

ねえ太郎どうかぼくに教えて

生きているってこつこつと

大好きだった犬の太郎

天国にいつてもぼくの友達

たくさんたくさんさよなら言った

もう泣いたりなんかしてないよ

太郎がぼくに教えてくれた

生きているってすばらしいこと

遙かな道程

子供の頃に描いた夢

誰にも負けない自身があつた

心の中に秘めた情熱

どんなこともできる気がした

だけどいつからだろう

こんな自分になつたのは

恋に破れて

全てがつまらなく思えた

友に裏切られ

誰もが信じられなくなった

暗闇が僕を包み込んだ

あのととき誓つた志

遠い彼方に見えなくなつた

夢を求め続けることが

こんなにも大変なんて

今まで知らずに生きてきた

今日からは目をそらさず

真直ぐに歩いていこう

たとえ何度挫折しようとも
勇気を出して歩いてゆこう

この遙かなる道程を

夢が叶うと信じて歩いていこう

正しい解を求めなさい

ぼくが好きなのは彼女

彼女が好きなのは先輩

先輩が好きなのは後輩

後輩が好きなのはぼく

複雑な恋の4次方程式

正しい解を求めなさい

ぼくが彼女に告白する

彼女が先輩に告白する

先輩が後輩に告白する

後輩がぼくに告白する

複雑な恋の4次方程式

結局みんな傷ついた

ぼくが後輩とつきあう

彼女がぼくとつきあう

先輩が彼女とつきあう

後輩が先輩とつきあう

複雑な恋の4次方程式

やっぱり誰か傷ついた

傷つきながらみんな

ほかの誰か好きになる

複雑な恋の4次方程式

試行錯誤のくりかえし

複雑な恋の方程式

この方程式に解はない

戦士

悪しきものに流されて
優しき心がくだけ散る

みずからの業に身を焼かれ
正しき道をふみ外す

おのが弱さをたなにあげ
他者のせいだと泣き叫ぶ

世がいかに変わろうとも
われの魂は朽ち果てぬ

剣をもとめ旅をする
われは孤高の戦士なり

たどりついた城跡に
悲しき十字架立ち並ぶ

召喚されし怪物が
血に飢えし亡者をいざなう

闇に浮かぶ雷光と烈風
時空をあやつる召喚士

ここで命が消えるとも
われの魂は朽ち果てぬ

剣を構えし対峙する
我は孤高の戦士なり

恋していますか？

小学生のころすきだった子

お姫さまみたいな可愛い子

隣に座って話かけたら

嫌いとわけなく逃げられた

中学生のころすきだった子

笑顔のあかるい元気な子

おもいきって気持ちを伝えたら

友達の間までいましようね

高校生のころすきだった子

ちょっぴり大人の部活の先輩

手ごたえ感じて告白したけど

思い違いであえなく玉砕

入試の日にすきになった子

鉛筆貸してくれた優しい子

合格して鉛筆返すと決めたけど

大学内で会うことなかった

これがいままでの恋の遍歴

実る事のなかった恋の物語

4戦4敗のぼくの恋の成績

それでもこりずに恋してる

思い出を捜すのはもうやめよう

何気ない気持ちのすれ違い
互いの距離を遠ざけた

記憶を詰め込んだはずの箱
埋めた目印がいまだ見つからない

時間の止まったままの写真
君の輪郭さえぼやけてしまう

見つかるはずもない
心の安らぎ求め
海辺の街にきた

何度となく通った場所
二人にたどり着く
足跡はない

遠くから聞こえる波の音
かき消されてく
君への思い

静かに歩き始めた僕
夕日が優しく
気持を包み込む

夕日をさえぎる為かざした手
君のぬくもりを感じる

砂浜に描いた君との未来
静かにそつと海へと返す

それでも僕は進んでいく

寂しさをまぎらすため

意味もなく叫んでみた

弱音をはきそうになり

少しだけ頑張ってみた

気持ちが伝わらなくて

思いを言葉に込めてみた

いろいろな問題にぶつかり

悪戦苦闘しながら進んでいく

そこに意味はないかもしれない

それでも僕は進んでいく

疲れた時は休み気分転換をしながら

僕の歩幅で進む

そこに答えはないかもしれない

それでも僕は進んでいく

僕は強くないけど僕が思うより弱くもない

そう励ましながら進んでいく

生きていくことは大変かもしれない

それでも僕は進んでいく

僕の思うように生きていくこと

もっともつと大変かもしれない

それでも僕は進んでいく

一緒にいるだけで素敵な魔法をかける君

映画の帰りに突然ふりだした雨

雨宿りする時間もなくて

臆病な僕が君の手をとり走りだす

心の音をかき消す雨に感謝しながら

足音が幾つもの恋の波紋をつけていく

一緒にいるだけで素敵な魔法をかける君

嫌いなはずの雨の日さえも好きになる

ずぶ濡れになりやつとたどり着いた駅

あわてて君が濡れた髪を直しだす

かわいい姿にみとれていと

僕の顔を優しくふいてくる

思いがけない君との距離に

自然と笑みもあふれだす

一緒にいるだけで素敵な魔法をかける君

ますます君を好きになる

心の翼

第一章

僕の心の翼よ

羽ばたけ

自由な大空へ

真っ白な心の翼よ

夢と希望をのせて

今 心をときはなて

未知なる光は

聖なる者を照らし

無限の可能性に導く

今 何かを手に入れるため

僕はひとり

大きな翼を広げ

天空へ羽ばたく

第二章

天空から舞い降りた天使

心の翼を広げ大空に羽ばたく

両翼に広がる限らない空

どこまでも蒼くはてしない

風の中にいくつもの思いを感じ

旋回する体に気持ち高ぶる

無数に浮かぶ雲の向こうに

尽きることのない希望を感じ

更なる高見に上昇す

紙飛行機

つらくてどうしようもないとき
紙につらいことたくさん書いて
わたしは紙飛行機を折る

窓辺から紙飛行機をとばす
紙飛行機が夕日の彼方に消えてゆく
つらい気持ちをのせながら

悲しくてどうしようもないとき
紙に悲しいことたくさん書いて
わたしは紙飛行機を折る

窓辺から紙飛行機をとばす
遠くまで紙飛行機がとんでゆく
かなしい気持ちをのせながら

心が少し軽くなった気がして
どこまでも紙飛行機みつめる

紙飛行機さんどうもありがとう
明日も元気で頑張れそうです

同窓会に思いをよせて

同窓会の通知がとどいた

みんなの記憶がよみがえる

将来を語り合った僕達の夢

進学就職で別れた僕達の道

みんな大人になっていく

気持だけはかわらない

久しぶりに話す仲間たち

みんなの笑顔が懐かしい

背が伸びていた僕の親友

名字が変わった僕の初恋

みんな大人になっていく

思い出だけが色あせない

楽しい時間が過ぎていく
みんなの心があたたかい
結婚がきまった僕の友達
少し丸くなった僕の恋敵
みんな大人になっていく
この瞬間さえも刻まれる

愛のない世界を生きる

心の中に浮かんでくる大切なひと

傷つけてばかりの俺だけど

君のことだけは守りたい

いつもそう思っていた

言葉の武器で攻撃してくる世の中で

強がっていた俺だけど

立ち向かっていくための

少しの勇気は持っていた

いくつ気持ちを吐き出してみても

かわらない現実に関持ちはかりがすれちがう

消え去った時間を拾い集めてみても

悲しみから立ち直るすべはみつからない

あの頃より少し大人になった俺が

届かない気持ちを捨て去り

愛のない世界を生きる

くだらねえと吐き捨てたこの世界で

くだらねえと吐き捨てたこの世界で
ちっぽけな何かをいまも探している

後悔を脱ぎ捨てたあの時から

振り向かず進むと決めたはずなのに

見つからないまま時だけ過ぎていく

それでも僕らはさまよい続け

たどりつくあてもなく生きていくだけ

将来の夢を語り合ったあの友さえ

気が付けば望まない道を歩いている

あきらめないと誓ったあの時から

立ち止まることなくここまで来たけれど

手に入れたものはなにひとつない

それでも僕らはさまよい続け

必ずある真実もとめ生きていくだけ

どしゃぶりの雨の中で

立ち上がれず

膝をつき

あきらめかけた　その時
君が手をさしだし微笑む

くだらねえと吐き捨てたこの世界で
やっと見つけたもの……

君しかない

初めて君を好きになったときから

誰にも打ち明けないで暖めていた想い

そつと気づいてもらいたくて

思いきって電話で誘ってみたよ

伝えたいことは山ほどあるのに

なかなかうまく話せなくて

時間だけがうそのように通りすぎていく

君を見つめることさえできなくて

ただふたり並んで歩いた公園の並木道

君が好きでたまらない本当だよ

運命が君に出会わせたら

僕はそれに従って生きたい本当だよ

君とならきつとうまくいくはずさ

だってこの気持ちもう止められない

そう君しかいない

もう君しか見つめられない

僕は不幸なおさなじみ

好きな男の子ができたよ
僕の瞳にはなしかけるきみ
相談あいてはなれるのに
恋人にはなれそうもない
僕は不幸なおさなじみ
大切なこといつも言えない

告白してふられたんだよ
僕の胸で泣きつづけるきみ
かける言葉もみつからず
抱きしめたままそばにいる
僕は不幸なおさなじみ
君との距離が近くて遠い

すごく好きだったんだよ
僕の隣で疲れて眠るきみ
優しく髪を撫でてあげると
可愛い寝息がもれてくる
僕は不幸なおさなじみ
狼なんかなれそうもない

運を手に入れよう

運は平等にめぐってくるといふけれど

誰もが平等に運を手に入れるわけではない

強い意志がない限り

永遠に運などつかめない

ただじっと待つだけでは

運に気づくことさえできない

不平不安をぶつけてみても

何もしなくちゃ変わらない

頭でないものを考えるより

行動しなくちゃ始まらない

さあ 運を手に入れよう

さあ 自分を磨いていこう

勇気を持って自分自身と向かいあい

新しい自分に出会える努力をしよう

僅かな運も逃さない

強い自分になるために

我が家の一大事

妹が知らない奴を連れて来た
生意気に俺より少し背が高い

妹いがいの家族みんなが大慌て

母親がうれしそうにお茶運ぶ
俺には女の気持ちわからない

妹が知らない奴と話している
俺よりちよっぴりおとこまえ

妹いがいの家族みんなが大混乱

父親が心配そうに部屋に行く
俺には男の気持ちよくわかる

妹が知らない奴と笑っている
どうやら俺よりきれそうだ

妹がだんだん大人にみえてくる

奴が俺と目があい会釈する
俺はやっぱり気に入らない

今日は我が家の一大事！

遠い日の気づかなかった僕の初恋

朝やけの霧のなかで少女と出会う

すけるような素肌にひかり輝く黒髪

純白の服に花びらがいくえも降りそそぐ

瞳を閉じて決して開かれることのない未来

約束が叶うことなく棺とともに閉じられる

僕の記憶に残り続ける不思議な残像

天国に旅ゆく少女をそつと見送る

生きる祈りを許すことないさだめ

やっと出会えた儚い命が消えていく

溢れてだして止まらぬ涙のさきの追憶

見上げた空に誓った思い全てがとけていく

遠い日の気づかなかった僕の初恋

ここからはじまる物語

突然のよびだし

訪れた校舎の屋上

名前も知らない君の口元が
「すき」と告げた

戸惑う俺の心のなかに
思いを寄せる人はなく

ただ見つめる君の瞳が
不安な心をかくし切れない

つきあう理由もないけど
断る理由も見つからない

傾きかけた西日が眩しく
見上げた空が心を染めていく

望む答えは簡単だけど
どうすればいいだろう？

うつむきあきらめかけた
君がさみしげでせつなくなる

君の勇気にこの思いに

笑いかけた僕がいる

にぎりしめた手から

緊張がほどけてゆけば

笑顔を見せる君と一緒に

物語はここからはじまっていく

心の天秤

僕の人生にいままで起こった

たくさんの楽しいできごとのおもり

たくさんのおもしろいできごとのおもり

ふたつのおもりを思い浮かべて

心の天秤にかけてみる

天秤が悲しいできごとに大きく傾いた

悔しくてこれから起こるだろう

楽しいできごといっぱい

思い浮かべて天秤にのせてみる

楽しいできごとのせていけば

不思議とのせるおもりの分だけ

心が軽くなっていく

楽しいできごとを考えれば

それだけで心が楽しくなってくる

心の天秤がつりあわないなら

たのしいできごとを考えよう

きつとそれはすぐに形になって

僕をしあわせにしてくれる

夢＋実現＝睡眠？

夢を持ちなさいと先生がいう

夢を持たなければいけないように

夢には姿や形がないのにどうしてだろう？

それでも無理やり考えていくうちに

ぼんやり夢が浮かんできた気がする

すると先生は夢とは願うものでなく叶えるものだという

夢はどうやら実現しないといけないらしい

ただみるだけの夢ではだめなのだろうか？

先生が紙に夢と実現方法をかけという

そんなに簡単に夢なんかかけない

そんなに簡単に実現方法なんか思いつかない

使わない頭を使い少し僕は疲れてきた

だんだんまぶたが閉じてくる

とりあえず眠ろう

こんな僕でも眠れば

夢がみえるかもしれないから……

かたちをかえる大切なもの

好きになった人にたまたま彼女がいた

彼女から彼を奪うほどの勇氣はなく

遠くから見つめていても思いはきつと届かない

出会いが遅すぎたそれとも……

答えは見つからない

初恋はかなわないと

誰もがいうけれども

かなえた人たちもきつという

わたしのこの思いはいくあてもなく

さまよいながらはじけて遠くへ消えていく

心のなかにつまれたはずの素敵な感情が

悲しくかたちをかえて心をおおいつくすとしても

それを受け入れて……

次へつなげる大切なものにかえていこう

彼女が教えてくれたもの

運動も勉強も勝てない奴がいる
顔貌も容姿も勝てない奴がいる
地位も名誉も勝てない奴がいる
金銭も資産も勝てない奴がいる
ぼくが絶対に勝てない奴がいる
上をみればきりがない

運動も勉強も負けない奴がいる
顔貌も容姿も負けない奴がいる
地位も名誉も負けない奴がいる
金銭も資産も負けない奴がいる
ぼくが絶対に負けない奴がいる
下をみればきりがない

幸運に彼女に選ばれた奴がいる
大切なこと彼女が教えてくれた
恋愛に勝ち負けなんか関係ない
恋愛に上下なんか関係ない

君のために僕ができること

悲しくて悲しくてどうしようもなく

何もてにつかず悩みが心をつつみこむ

君が人生に絶望し立ち止まったとき

「あなたがそばにいるから大丈夫」

君に再び歩きだす勇気を与える

そんな男に僕はなりたい

君と一緒に生きていきたい

うれしくてうれしくてどうしようもなく

喜びの気持ちが優しく心をつつみこむ

君に人生の祝福の光があふれたとき

「あなたがそばにいてくれたから」

君をいつも笑顔で満たすことができる

そんな男に僕はなりたい

君と永遠に生きていきたい

小さな風景

変化もなくただ過ぎていく

繰り返すだけの規則化された毎日

疲れて自宅に向かう道で

俺はふとあゆみを止めた

冷たい風がそつとふきぬけ

夏の終わりを告げる妖精たち

季節の終わりと始まりを同時に告げる木々の交わり

傾きかけた日差しがやさしく俺に微笑みかける

いつもと同じ道に見つけた小さな風景

忙しさの中に埋もれていく小さな風景

この瞬間をとめておくことはできないけれど

忘れてはならない大事な風景

なにげない日常でみつけた俺だけの風景

君がさよならを言った日

鏡に向かって笑ってみた

楽しいことを思い浮かべ笑ってみた

たくさん思い浮かべて笑ってみた

鏡の中の僕が泣いていた

すべて君との思い出だった

出会ったころの二人でいられたら

こんな気持ちにはならなかっただろう

気が付けばこうなっていた

どちらが悪いというのではなく

互いの価値観が変わっただけ？

別れの徴候に気づかぬふりをして

修復不能な恋にしがみついていた

静かすぎる部屋で一人きり

今日だけは君のことを考えよう

思い出と呼ぶにはまだはやすぎるから……

心の叫びは聞こえるかい？

誰にも気づかれなくて

自分自身さえ見失って

ただ流されていくだけの日々

あの瞳の奥の輝きさえも

取り戻すことはできないのか

生まれながらにある大切なもの

変わらないで心に残るもの

失わないでつかみとるもの

忘れないで持ちつづけるもの

取り戻すことはできないのか

現実という名の悲しい虚無の中

絶望にうもれ動けないままの

みじめなむなしき生き方に対して

心が叫ぶ「おのれを信じろ」

心が叫ぶ「夢をあきらめるな」

心の叫びがこだまする

君とすごした夏祭りをわすれない

祭ばやしにさそわれて

まばゆい赤い光の輪を目指す

浴衣姿の君の手をにぎりしめ
ずっと一緒にすごしていたい

露店にあふれる人たちの

にぎやかな声につつまれる

かき氷を二人でたべながら

幸せも一緒にかみしめた

花火の音が聞こえてくる

七色に輝く道があるいてゆく

太鼓の音よりもはずむ鼓動

二つの影がそつとよりそう

刻みこむ気持ちとともに

見つめあう君とはじめて

ときを止めるほど素敵な

くちづけをかわした

君とここからも続く日々の中で
わすれられない夏祭り

僕が思う大切なこと

僕の前に2つの道がある

ひとつは君と歩む未来

もうひとつはひとりで歩む未来

どちらを選ぶべきだろうか？

君と一緒にでも幸せとは限らない

ひとりでも幸せなことがあるかもしれない

どちらが幸せかはわからない

未来がどうなるか誰にもわからない

ほかの誰かと歩む未来があるかもしれない

僕の前に2つの道がある

ひとつは夢を追い求める世界

もうひとつは夢をあきらめた世界

どちらを選ぶべきだろうか？

夢が叶っても幸せとは限らない

夢がなくても幸せかもしれない

どちらが幸せかはわからない

夢が叶うかどうか誰にもわからない

ほかの夢をみつけ叶えるかもしれない

道に迷うことはいつだってある

最良と思つた道で後悔することもある

僕が思う大切なことは

慎重に熟慮して道を選んだならば

後は迷うことなく進むということ

選らんだ道の良し悪しはおそらく

人生が終わる瞬間までわからないものだから

用意した言葉や音楽さえも無意味にするもの

海辺の素敵な場所へ
彼女をつれていく

絶対に告白すると
意気込んでみたものの

車が渋滞につかまり
空からは大粒の雨

用意したはずの言葉
今日も使わず繰り越される

お気に入りの音楽まで
彼女の趣味に合わなくて

会話はとぎれぎみ
思いだけがからまわり

夕立はすぎたのに
車内の冷房がきかなくなる

神様はなんて残酷
今日も嘆きが繰り返される

どうにでもなれと

車をよせて窓を開ければ

彼女が僕に振り向いて

無邪気に微笑みかける

はてしなく伸びる虹が

二人の未来に続く道のように

七色に光り輝いていた

物理が好きな僕の彼女

人間関係につかれて

僕が彼女につぶやく

摩擦のない世界にいきたい

摩擦がなければ止まらない

永遠に走り続けて疲れるだけ

彼女が僕に手を重ね答える

立ち止まることができたから

僕らは出会うことができたのかも

彼女はやっぱりおもしろい

物事がうまくいなくて

僕は彼女につぶやく

心が落ち込んでしまう

地球に重力があるから心も落ちる

無重力なら心は浮かんたままかも

彼女が僕に唇を重ねる

不思議と心が軽くなり

気分はまるで無重力状態

彼女はやっぱりおもしろい

君ならどんな夢を追い求める？

一人でかなえる夢

仲間でかなえる夢

地域でかなえる夢

夢にはいろんな形がある

ひとつの夢がだめなとき

いろんな夢を捜せばいい

ひとつの夢にこだわらず

いろんな可能性

さがしてみよう

夢のかなえかた

きつとひとつじゃない

家族とかなえる夢

友達とかなえる夢

恋人とかなえる夢

夢にはいろんな形がある

ひとりの夢がだめなとき

みんなで夢を捜せばいい

ひとりで夢を抱え込まず

みんなで可能性

さがしてみよう

みんなでかなえるほうが

夢はきつと面白い

どうにもできなくて

好きな気持ちだけでは

どうにもならないことが多すぎて

生き方をみなおしてみろ

出会えたころの思いが消え

どうしようもない空しさが募る

積み重ねてきた出来事すべて

無駄にしたなんて思いたくない

別れが訪れ感情が麻痺したとしても

互いを傷つけず進んでいく

言いたいことを胸にひめて

君に会えたこと忘れない

きつとよかったと心から思える日

今は無理だけど必ずくると信じて

これからの日々の生きる糧にしてい

く大切なものは心に残したまま

どうにもできなくて（後書き）

とりあえず今回で終了にします。
いままで読んでいただきありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0607u/>

詩集：ポエムな世界

2011年11月16日16時22分発行